

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520167

研究課題名(和文) 土田麥僊における人物画の解明と京都画壇における位置

研究課題名(英文) TSUCHIDA Bakusen: Explication on Portraiture and Position in the Modern Kyoto Painting Circle

研究代表者

上田 文 (UEDA, Aya)

京都工芸繊維大学・文化遺産教育研究センター・特任助教

研究者番号：30600291

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：近代京都で活躍した日本画家、土田麥僊の人物画についての研究である。麥僊は人物画の中でも特に舞妓図を得意としたが、「美人画家」には分類されてこなかった。それはなぜか。本研究では肖像性と象徴性という観点から作品の分析を行った。写生を重視した麥僊の人物画からは、明らかにモデルの特徴が読み取れる一方、麥僊の残した記述からは麥僊が平安時代の仏画に注目し、信仰と優美の一致を目指していたことが明らかになった。舞妓と仏画という隔たりの大きい画題を融合させようとしたところに麥僊の特異性があったと結論づけた。これは京都画壇においても特異な位置を占めている。

研究成果の概要(英文)：TSUCHIDA Bakusen(1887-1936) was a Nihonga (the Japanese painting) painter, who painted many Maiko paintings in modern Kyoto. Nevertheless, his works have not been classified into so-called Bijinn-ga (the genre painting of beautiful women), unlike the paintings of UEMURA Shoen, KABURAKI Kiyokata and ITO Shinsui. This fact likely suggests that his works were distinctive in terms of painting styles, such as fine lines and bright flat color, as well as painting aims. By using two analytical viewpoints, personality and symbol, this study reveals that his painting presents high personality of individual model while at the same time symbolizing yearning for graceful Buddhist world. His works combine the personality of Maiko face with religious yearning for the Buddhist painting of Heian period. The image of two, Maiko and Buddha, are far apart from each other, and therefore, Bakusen's portraiture that combined both of them creates a new fascination.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：土田麥僊 近代日本美術 日本画 京都画壇 人物画

1. 研究開始当初の背景

これまで近代日本画家、土田麥僊(1887 - 1936)について、初期の写生帖、「大原女」、渡欧後の「舞妓林泉図」、最晩年の「妓生の家」などを通して、その特質を考察してきた(上田文「土田麥僊 初期の作品について『春の歌』『罰』『徴税日』における明治30年代後半の西洋絵画受容をめぐって」『鹿島美術研究』年報第19号別冊、2002年11月、同「土田麥僊『大原女』図考 京都画壇近代化の方向を探る」『美術史を愉しむ多様な視点』思文閣出版、共著、1996年5月、同「土田麥僊のヨーロッパ 渡欧による芸術観の変化について」『美学論究』第14編、1999年3月、同「土田麥僊『平牀』と『妓生の家』について 近代日本美術における朝鮮の美をめぐって」『美学』第233号、2008年12月)。

従来の研究では、麥僊に関しては、主に西洋画からの影響や、日本の伝統絵画でも桃山時代の影響が指摘されてきた。けれども麥僊が記した文章(土田麥僊「人物画法」『アルス大美術講座』第1巻、1926年)からも明らかであるように、「人物画」については、「真言祖師像」(平安時代)のような古い時代の古典的で宗教性を帯びた作品への注目が大きかった。麥僊が得意とした人物画を考察するにあたっては、こうした古代の仏画への関心を考慮にいれなければ本質に迫ることはできないと考えられるようになった。

また麥僊の師である竹内栖鳳の人物画については、これまで栖鳳研究の立場から研究が進められてきたが、京都画壇において新しい試みに初めて挑戦した栖鳳の人物画に対する制作態度を、麥僊研究の立場から再検討する必要があると考えられるようになった。あわせて、栖鳳塾での先輩にあたる内島暁園という画家について、近年の研究で画業を明らかにできたので(上田文「内島暁園について 近代京都画壇から見た画業」『鹿島美術研究』年報別冊、2010年11月) 栖鳳から暁園、麥僊へという人物画の展開のなかで、麥僊の京都画壇における位置を確認したいと考えた。

また近年、麥僊が制作した最後の舞妓図である「歌妓図」の下絵がボストン美術館に所蔵されていることが判明した。他に韓国国立中央博物館にある「妓生の家」、パリのギメ美術館にある「舞妓」「朝顔」なども知られており、大英博物館に『麥僊畫集』があることも明らかとなった。こうした海外にある作品を含めた考察をおこなうことは、これまでにない新しい視点を付け加えることを可能にし、今後より発展的な考察を可能にすると思われるに至った。

2. 研究の目的

これまでの研究の延長線上の問題として、

土田麥僊が得意とした人物画について、モデルの「肖像性」と麥僊が意図した普遍的な「象徴性」という、一見矛盾する造形上の両義的側面から作品の特質を解明し、その上で京都画壇の中に置き直し、その特異性を明らかにする。

3. 研究の方法

以下の4つの方法で調査を進めた。

- 作品調査。土田麥僊の人物画とその制作過程を示す写生、下絵類の調査。
- 一次資料調査。麥僊の書簡および当時の新聞、美術雑誌記事などの調査。これまでに発表されていない書簡の発掘と、新聞、雑誌記事に掲載された麥僊の人物画制作に関する文章の分析を行う。
- 二次資料調査。一次資料調査で得た麥僊が注目した人物像の調査分析をし、それらから麥僊が何をくみとり、自らの制作に利用したのは何であったのかを考察する。
- 比較検討。同時代の他の画家の人物画、肖像画との比較検討を通して、近代京都画壇における麥僊の位置を明らかにする。

4. 研究成果

・初年度の研究成果

- 作品調査。海外の麥僊作品、下絵調査(「妓生の家(未完成)」「妓生の家(大下絵)」韓国国立中央博物館、「歌妓図(大下絵)」ボストン美術館)および日本国内の土田麥僊の下絵、素描類調査(「燕子花(草稿)」大和文華館、「妓生の家(素描)」京都国立近代美術館、「明粧(大下絵)」京都市美術館)。

韓国国立中央博物館所蔵の「妓生の家」は、麥僊の絶筆で、画家の全画業を考察するうえで欠かせない作品であるが、これまで容易に調査できなかったものである。この度、未完成作と大下絵を同時に詳細に調査できたことは非常に有り難い機会であった。またボストン美術館の「歌妓図(大下絵)」は、これまで日本では知られていなかったもので、完成作が焼失したと思われる現在では非常に貴重な資料である。麥僊の最晩年の舞妓図の描線、構図について新たな知見を得た。国内にある下絵、素描類は麥僊の人物画の特異性を解明する上で重要かつ必要な作品である。

- 一次資料調査。当時の朝鮮半島での新聞記事および地図、当時発行された『朝鮮美人寶鑑』によるモデル調査。
- 二次資料調査。陳鑑如筆「李斎賢像」(韓国国立中央博物館)は麥僊が朝鮮半島で制作した時に、現地で注目した作品で、現在の韓国の美術史でも重要な作品であることを改めて確認した。存在感のある人物画で、彩色に厚みがあり、構図も緊密なもので、麥僊の「妓生の家」においても影響を指摘できる。また韓国の美術研究者と麥僊作品について

意見交換を行い、国外からの視点を学び非常に有意義であった。

d) 比較検討。メトロポリタン美術館調査に所蔵される近世近代の京都画壇の作品調査および竹内栖鳳「天女舞楽図草稿」(東本願寺) 栖鳳「散華」「アレタ立に(大下絵)」小林古径「極楽の井(大下絵)」(以上3点、京都市美術館)

メトロポリタン美術館の作品は、日本ではほとんど顧みられなかった幕末から明治時代にかけての京都画壇の作品で、こうした作品を含めた京都画壇の全貌を視野に入れ、麥僊の新しさを考察することができた。栖鳳が裸体の天女を描こうとして未完成に終わった東本願寺天井画草稿や下絵類、および舞妓図「アレタ立に(大下絵)」の調査からは、麥僊の人物画制作に与えた影響の大きさとともに、栖鳳にはなかった麥僊独自の制作視点を汲み取ることができた。

・次年度の研究成果

a) 作品調査。肖像性と象徴性について作品分析を行うための下絵、素描、写生帖などの調査。新潟県立近代美術館、新潟市美術館、佐渡博物館、新穂歴史民俗資料館、知足美術館、敦井美術館(以上新潟県)、東京国立博物館、東京国立近代美術館、山種美術館(以上東京都)、京都市立芸術大学、京都市美術館、京都国立近代美術館、大阪市立近代美術館建設準備室、足立美術館(島根県)など各館所蔵の麥僊作品、下絵、素描、写生帖などについて詳細な調査を行った。麥僊の素描は相当数にのぼり、改めて綿密な制作過程を確認することができた。

b) 一次資料調査。麥僊の郷里佐渡では個人宅より麥僊書簡とゆかりの作品を新たに見出すことができた。これらは今まで全く公にされてこなかったもので、麥僊の新たな一面を窺わせる貴重な資料である。その他、新聞、美術雑誌記事の探索を集中的に行い、人物画のモデルについて調査した(国立国会図書館、京都府立図書館、京都府立総合資料館、京都大学人文研究所図書館、京都工芸繊維大学図書館、関西学院大学図書館など)。

c) 二次資料調査。麥僊が注目した古典作品についての見聞を広げた。京都国立博物館、京都市考古資料館、奈良国立博物館、京都・奈良・鎌倉の寺社仏閣など仏像・仏画についても調査を進めた。麥僊が注目した作品に一定の基準、特徴のあることが判明してきた。

d) 比較検討。鍋木清方、上村松園など同時代の人物画を得意とした日本画家についても調査を進めた(鍋木清方記念美術館、上村松園展観覧、その他、清方、松園についての文献資料の収集)。これらの日本画家の作品や制作態度と比較することで、麥僊の位置づけがより明確になる。

・最終年度の研究成果

a) 作品調査。これまで絵の具の剥落など、

作品の状態に配慮して実作品の調査が難しかった土田麥僊の代表作「島の女」(東京国立近代美術館)、「海女」(京都国立近代美術館)、長い間所在不明であった「三人の舞妓」(1916年)について特別に調査を行うことができた。麥僊の人物画解明のためには、構図や題材とともに技法が大きく関わっていることが、本研究過程において、ますます明らかになってきた。絵の具の剥落やヒビなど傷みを引き起こすような革新的な新しい技法を詳細に調査できた意義は大きかった。また日本にある「歌妓図(未完成)」(京都市美術館)の調査を行った。ボストン美術館にある作品とあわせて検討し、考察を加え、これまで下絵とされてきた「歌妓図(未完成)」の正しい位置づけができた。

b) 一次資料調査。北欧の画家、ニルス・ダルデルの資料調査および翻訳。麥僊の作品がヨーロッパでどのように評価されたのか、という新しい視点による研究として、ニルス・ダルデルの作品への影響を見出した。ダルデルは、ディアギレフが率いたバレエ・リュスに対抗しうる前衛バレエ団バレエ・スエドワの舞台美術も手がけ、1920年代のパリで活躍したスウェーデンの画家である。麥僊の作品にインスピレーションを受けた西洋画家の存在は、全くの新知見であり、同時代の外国の画家からの評価という視点で麥僊の人物画について考察できると思われる。これまで西洋画からの影響が指摘される一方であった近代日本画のなかで、西洋画に影響を与えた事例の一つとして重要である。

c) 二次資料調査。麥僊「俱舍曼荼羅模写」の調査(笠岡市竹喬美術館)。麥僊が「散華」を制作する際に参考として模写した東大寺の俱舍曼荼羅像からは、古代仏画に対する研究的態度が看取され非常に参考になった。

d) 比較検討。京都画壇の他の画家についての調査。竹内栖鳳展(東京国立近代美術館、京都市美術館)、皇室の名宝展(東京三の丸尚蔵館、京都国立近代美術館)、小野竹喬「暮るゝ冬の日」(笠岡市竹喬美術館)、村上華岳「聖者の死(大下絵)」(京都市美術館)についての作品調査。

・研究期間全体を通じて実施した研究の成果

本研究課題では肖像性と象徴性という、一見矛盾する両面から土田麥僊の人物画の特異性を解明しようとした。麥僊の人物画の中でも、舞妓図を中心に考察を行った。モデル舞妓の写真と、麥僊の写生、素描、本画をたどりながら具体的に肖像性を跡づけることができた。一方、象徴性については、麥僊の著作の探索から平安時代の仏画への憧憬を舞妓像に盛り込もうとしていたことが明らかとなった。当時から麥僊が舞妓を描いても美人画家の範疇に入れられなかったのは、麥僊の舞妓図が美人画から逸脱した何かがあったからであろう。それは、本研究で指摘したように、対象の写生という現実的な肖像性

に、精神的な象徴性を盛り込もうとした、両義性に起因するのではないかと考察した。舞妓の肖像性と仏画への憧憬という象徴性、これら二つのかけ離れた世界を融合しようとしたところに、麥僊の独自性、特異性があったと結論づけた。京都画壇における位置については同時代の美人画家、上村松園と比較を行った。同じようにモデルの写生を重視した松園が主眼をおいたのは故事や風俗であって、麥僊が舞妓図に精神的な憧れを込めたこととは異なる。今後は舞妓図だけでなく麥僊の人物画全体に考察をひろげていきたい。

論文成果の他に、土田麥僊の作品、下絵、素描など、国内だけでなく、韓国、ボストンなど海外の美術館に所蔵されている作品を含めた調査をすることができ、海外からの作品評価という、新たな視点を付け加えることができるだろう。今後は土田麥僊の全画業を通して、さらに広い視点から近代京都画壇、近代日本美術についての考察を深めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

上田文「土田麥僊の人物画について 肖像性と象徴性をめぐる考察」『デザイン理論』62号、2013年

〔学会発表〕(計 1件)

上田文「土田麥僊の人物画について 肖像性と象徴性をめぐる考察」第212回意匠学会研究例会 2012年11月24日(於：京都造形芸術大学)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上田 文 (UEDA Aya)

京都工芸繊維大学・文化遺産教育研究センター・特任助教

研究者番号：30600291

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：